

# 前近代に於ける東アジア三国の文化交流と表象 —朝鮮通信使と燕行使を中心に—

崔 博光

1. 序
2. 文明・貿易の道  
    —漢陽から北京、江戸へ—
3. 異文化の受容と朝鮮の朱子学
  - 1) 小中華思想と夷狄の国
  - 2) 朝鮮の朱子学と仮名草子
4. 文化の発信者と転信者としての使節
  - 1) 朝鮮の文人と古義堂
  - 2) 北学派文士と清朝考証学
5. 平和と文明圏の形成
  - 1) 東医宝鑑と実証漢方医学
  - 2) 西学の受容と生活化
6. 結

## 1. 序

近世に於ける朝鮮、徳川幕府、清の東北アジア三国は一つの儒教文明圏を形成していた。それには様々なことが想定されるが、長く持続された平和と文化交流がその要因の一つとして挙げられる。鎖国体制下に於いて東北アジアの地域内の唯一の開かれた通路は朝鮮に始まる。朝鮮は地政学的特性上「事大交隣」政策を取っており、清には燕行使を、徳川幕府には通信使をそれぞれ派遣した。この使節団が鎖国下に於いて東北アジア三国を連結する橋梁的役割は勿論、文明圏を形成する牽引車的、立役者的役割をしたということはすでに周知のことである。

朝鮮は清に総673回の燕行使を、徳川幕府には12回の通信使を派遣した。本稿では朝鮮から派遣した燕行使と通信使が文化の発信者と転信者としての役割と活動を考察し、現代的意味を探るものである。

又、これを通して文明圏内の政治、経済、文化、文明という巨視的視野と、一方漢詩文、文学、学術、思想、韓方医術、西洋学術の受容という具体的な面などの実相を実証的かつ具体的に考察し、近代的意味として知の蓄積、さらに東北アジア文明圏形成の断面を糾明するものとする。

## 2. 文明・貿易の道—漢陽から北京、江戸へ

朝鮮は建国以来、事大交隣政策を標榜し、その後朝鮮朝後期にもこの政策を継続維持した。「燕行使」とは清に派遣した使節のことである。前朝の明に対しては朝天使と称し、清にしてはそれとは別に燕行使と呼んだ。これとは別に、日本に派遣する使節は通信使という称号を使用した。「通信」とは「信を通わす」という意味で、隣りの国の間に誠信をもって往来するという意味である。

燕行使はその任務に従って正朝使、冬至使、聖節使、千秋使等の定期の派遣があり、その外にも謝恩使等各種の慶弔事に不定期的に派遣する場合もあった。朝鮮が清朝へ最初に使節を派遣した1637年から最後の1876年まで約240余年にわたって総673回の「燕行使」を派遣した(『同文彙考』)。反面に清が派遣した勅使は165回である。両国が相互派遣した回数を合わせると838回で1年に3、5回程度の往来であることになる。

一方、朝鮮が徳川幕府に通信使を派遣したのは第1次である1607年から最後の派遣となる1811年まで延べ12回である。それに対し、徳川幕府が朝鮮に派遣した修聘参判使(通信使 清來差使)は約50回で、彼らは幕府の外国の窓口である対馬藩の案内で釜山の東萊府と修聘に関する任務を遂行して、帰国することになる。

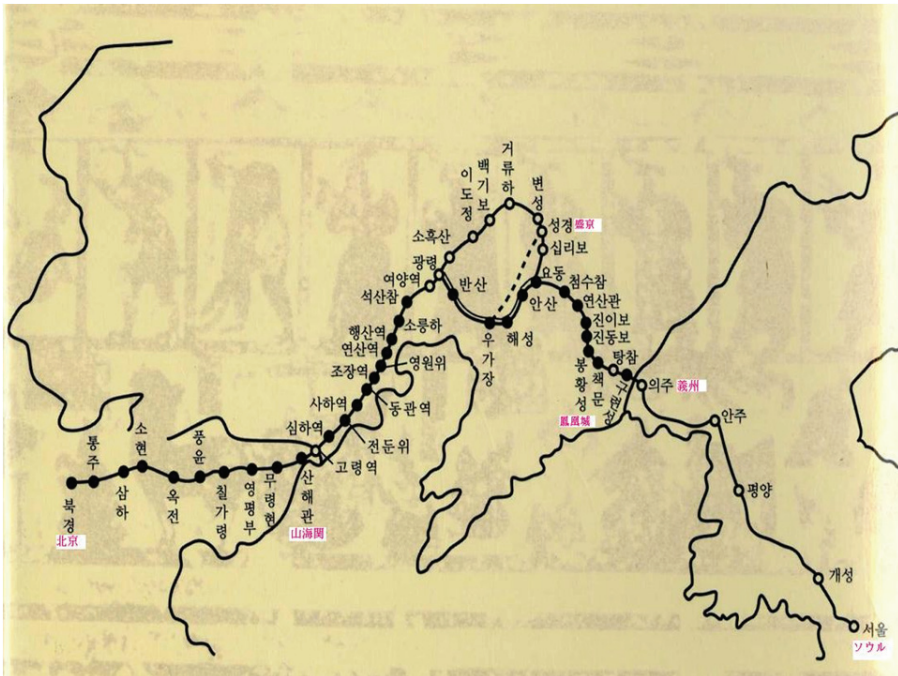
燕行使の構成人員は馬夫まで含めて大概250名ほどである。通信使の場合は500余名であり、この人員中船員が100余名になる。燕行使の往復に所要する期間は派遣の時期により少し違うが、大概4、5ヶ月程度の期間が所要される。清の勅使一行は50余名であり、滞留期間を包めて往返に所要される期間は短いほうである。通信使の場合は海の道であるため気象条件により日程は違うが、大概7、8ヶ月ほど所要される。燕行使は路程の時期により、所要期日が若干違う。別表の路程図から見るように義州から盛京までが540里、盛京から北京までが1,509里大概2,000余里である。この全路程の主要地点、殊に柵門、北京、盛京、中後所(東関駅近所)等の地で貿易が行われる。

## 朝鮮通信使一覽表

年 代			正使	副使	從事官	製述官	書 記	訳 官	写字官
西曆	朝 鮮 日 本	干支							
1607	宣祖40 慶長12	丁未	呂祐吉 (癡溪)	慶暹 (七松)	丁好寬 (一聚)	学官 楊万世		金孝舜・朴大根 韓德男	書写員 下鉄寿
1617	光海君9 元和3	丁巳	吳允謙 (楸灘)	朴椿 (雲溪)	李景履 (石門)			朴大根・崔義吉 康遇聖・鄭純邦 韓德男	宋孝男 嚴大仁
1624	仁祖2 寛永元	甲子	鄭翌	姜弘重 (道村)	辛啓榮 (仙石)			朴大根・李彦瑞 洪喜男・康遇聖	李誠国 (梅菴) 金信男
1636	仁祖14 寛永13	丙子	任統 (白麓)	金世謙 (東溪)	黄原 (漫浪)	吏文学官 權儀(菊軒)	文弘績 文邵	洪喜男 姜渭賓 康遇聖 李長生	朴之英 能書官 金榮 (梅陰) 趙廷玟
1643	仁祖21 寛永20	癸未	尹順之 (津溪)	趙綱 (龍洲)	申瀟 (竹堂)	談祝官 朴安期(螺山)		洪喜男 李長生	金義信 (雪峯)
1655	孝宗6 明暦元	乙未	趙珩 (翠屏)	俞瑒 (秋潭)	南龍翼 (壺谷)	談祝官 李明彬(石湖)	裴穢 金自輝 朴文源	洪喜男 金謹行 洪汝雨	金義信 柳応発 郭琛 尹徳容
1682	肅宗8 天和2	壬戌	尹胤完 (東山)	李彦綱 (鶯湖)	朴慶後 (竹庵)	成琬(翠虚)	林椿 李聘齡(鵬溪)	朴再興 卞承業 洪禹載	李三錫 (雪月堂) 李華立
1711	肅宗37 正徳元	辛卯	趙泰億 (平泉)	任守幹 (靖菴)	李邦彦 (南岡)	李磻(東郭)	洪舜衍(鏡湖) 嚴漢重(龍湖) 南聖重(泛叟)	崔尚嶠・李碩麟 李松年・金始南	李寿長 李爾芳 (華菴)
1719	肅宗45 享保4	己亥	洪致中 (北谷)	黄培 (鶯汀)	李明彦 (雲山)	申維翰(青泉)	張応斗(菊溪) 成夢良(長嘯軒) 姜栢(耕牧子)	朴再昌 韓後瑗 金因南	金景錫 鄭世榮
1748	英祖24 延享5 (寛延元)	戊辰	洪啓禧 (潜窩)	南泰普 (竹裏)	曹命采 (蘭谷)	朴敬行(矩軒)	李鳳煥(濟庵) 柳返(醉雪) 李命啓(海阜)	朴尚淳 玄徳淵(疏窩) 洪聖龜	金天秀 玄文龜
1764	英祖40 宝暦14 (明和元)	甲申	趙職 (济谷)	李仁培 (吉菴)	金相翹 (弦庵)	南玉(秋月)	成大中(龍淵) 元重季(玄川) 金仁謙(退石)	崔鶴齡(居今齊) 李命尹(華庵) 玄泰翼(長洲)	洪聖淵 (景齋) 李彦佑 (梅窩)
1811	純祖11 文化8	辛未	金履喬 (竹里)	金勉求 (南霞)	廢止	李顯相(太華)	金善臣(清山) 李明五(泊翁)	玄義海(垣垣軒) 玄斌(一蓮) 崔昔(菊齋)	皮宗鼎 (東岡)

画 員	良 医	医 員	接伴僧	使 命	総人員 (大坂留) [京都留]	使行録	備 考
李弘胤		朴仁基 辛春男	景轍玄蘇	修好・ 回答兼刷還	504 [100]	海槎録 (慶七松)	鎌倉遊覧・駿河湾 遊覧・洛中遊覧
柳成業		鄭宗礼 文賢男		大坂平定・ 回答兼刷還	428 [78]	東槎上日録 (呉楸灘) 東槎日記 (朴椿) 扶桑録 (李石門)	京都伏見聘礼 俘虜人説諭官巡回
李彦弘		鄭崧 黄徳業	規伯玄方	家光襲職・ 回答兼刷還	460 [114]	東槎録 (姜弘重)	俘虜人説諭官巡回 烏銃購入
金明国 (蓮潭) (醉翁) (荷潭)		白土立 韓彦監	玉峰光璫 (東福寺) 棠陰玄召 (東福寺)	泰平之賀	478 (不明)	丙子日本日記 (任統) 海槎録 (金東溟) 東槎録 (黄漫浪)	日本国大君号制定 日光山遊覧 康遇聖著 捷解新語 馬上才 (対馬藩邸)
金明国 (命国) 李起龍 (几隠)			鈞天永浩 (建仁寺) 周南門旦 (東福寺)	家綱誕生	477 (不明)	東槎録 (趙龍洲) 海槎録 (申竹堂) 癸未東槎日記	日光山致祭 馬上才 (染畑御殿)
韓時覺 (雪灘)		韓亨国 崔 惻 李繼勳	茂源紹柏 (建仁寺) 九岩中達 (建仁寺)	家綱襲職	485 (100)	扶桑日記 (趙珩) 扶桑録 (南彦谷)	大猷院靈廟致祭 馬上才はなし
咸佛健 (東巖)	鄭斗俊	李秀蕃 周伯	太虚顕雲 (相国寺) 南宗祖辰 (東福寺)	綱吉襲職	473 (113)	東槎録 (金指南) 東槎録 (洪禹載)	副使將侍洪世泰(滄浪) 馬上才 (八代河内岸)
朴東普 (青丘子)	奇斗文	玄万奎 李潤	別宗祖縁 (相国寺) 雲壑永集 (建仁寺)	家宣襲職	500 (129)	東槎録 (任守幹) 東槎録 (金顯門)	新井白石の改革 馬上才 (田安門内) 所司代問慰
咸世輝	權 道	白興銓 金光酒	月心性湛 (天竜寺) 石霜竜菴 (東福寺)	吉宗襲職	475 (129)	海槎日録 (洪北谷) 海游録 (申青泉) 扶桑紀行 (鄭后僑) 扶桑録 (金滄)	馬上才 (田安門内) 弓射芸 (上野車坂下) 所司代問慰
李聖麟 (蘇齋) (崔北 (居其齋))	趙崇寿	趙德祚 金德崙	翠岩承堅 (天竜寺) 玉嶺守瑛 (東福寺)	家重襲職	475 (109)	奉使日本時間見録 (曹蘭谷) 隨使日録 (洪景海) 日本日記	馬上才 (田安門内) 弓射芸 (上野下寺町) 所司代問慰
金有聲 (西巖)	李佐国	南斗旻 成瀾	維天承贍 (相国寺) 桂岩龍芳 (東福寺)	家治襲職	477 (110)	海槎日記 (趙濟谷) 癸未使行日記 (呉大齡) 癸未隨槎録 日本録槎上記 (成大中) 仙槎漫浪集 (成大中) 和国志 (元重拳) 日東壯遊歌 (金退石)	馬上才 (田安門内) 弓射芸 (上野下寺町) 崔天宗刺殺事件 朝鮮人国役金御免越訴 所司代問慰
李義養 (信園)	朴景郁	金鎮周	月耕玄宣 (東福寺) 龍潭周禎 (天竜寺)	家齊襲職	328	辛未通信日録 (金履喬) 東槎録 (柳相弼) 烏遊録 (金善臣)	対馬府中聘礼 馬上才はなし

[図 1] 通信使一覽表 辛基秀・仲尾宏作成



[図 2] 燕行路程道

燕行使の正官は使行の任務により若干の差異があるが、30名乃至35名で構成される。その他、馬夫奴子が220余名になる。正官の中には正使、副使、書状官の以外に堂上官、上通事、小通事、質問従事官、押物従事官、駕丁押物官、押幣従事官、押米従事官、清学新遞兒、偶語別差、別遣御医、写字官、医員、画員、軍官、灣上軍官等で構成され、この中に貿易を管掌する訳官職責が殊に多いことから見て、使行時に貿易を重視したことがはっきり現われている。



[図 3] 槎路勝區圖の釜山鎮



[図 4] 朝鮮船入津之図慶応大学図書館所蔵



[図 5] 川御座船

通信使の路程はソウルから出発して釜山の永嘉台から対馬藩の案内で出発する。対馬島から瀬戸内海を経由して大坂に到着するとそこから日本の船に乗り換えて、淀川をさかのぼり、淀浦で下船する。そこからは陸路で江戸までいく。

通信使一覧表から見るように正官の役職を見ると正使副使と従事官3人を除外した製述官、書記、写字官、画員等に数多い人員が配定されている。

これは交易と貿易に重点を置いた燕行使とは別に学問交流、文化交流に重点をおいたことを示すものである。交易と貿易に関することは釜山にある倭館から北京をつなぐ仲介貿易が行われるためである。釜山の倭館は長崎の中国商館より十倍を超える十万坪の敷地に、建物の規模も[図6]から見られるように大きい規模である。そこに常住する人々も500~600余りの人数であり、1700年代の初盤になると来往人が年間延八千人に達したという。



〔図 6〕釜山倭館



〔図 7〕東萊府使接倭使圖

朝鮮朝初期には対馬の来往船を歳遣船20隻、特送船、そして交易船である八送船だけに入出を制限したが、対馬は交易の量をふやすために八送船をより大型化して、年間50隻を超える貿易船が釜山を出入したという<sup>1</sup>。1684年に長崎に中国商館が開設されてからはその前より交易量は減少したが、しかし仲介貿易は好況がつづいた。

漢陽から北京までの燕行使の路程は時期により若干の変動はあったが、従来の路程を若干変更すると移動が可能であった。現在当時の路程図に対する記録は多く伝わっているが、案内図である画を調べるのは難しい。断片的なものとして万里の長城、紫禁城等を描いたいくつかがあるだけだからである。その代わり、清朝の勅使である阿克敦が画工に描かせた「奉使圖」(20図)がある。総20幅で、鳳凰城の外で野宿する場面から、漢陽の慕華館、そして帰路の義州に至るまでの風光を描いたものが題画詩と共に伝わっている。

これを通して当時の社会相、生活相、儀礼、風俗、遊び、政治、文化、経済等の多方面の様相が調べられる。一方、1748年通信使の画である「槎路勝區圖」が伝わっている。この画は釜山の出発の光景から、江戸にて国書奉呈に至るまでの日本の路程に従って各地方の風光と文化を含めており、当時の文化を調べるには大変面白い資料である。

<sup>1</sup> 李進熙、『江戸時代の朝鮮通信使』、講談社学術文庫、1992年

まず、[図6]は釜山出発の場面を描いた作品である。画の左側に釜山という地名が表記されている。画幅の中央に高くそびえている子城台の下から釜山鎮城が囲まれている。城の外側にある台が永嘉台であり、その上に立っている建物が息波樓である。永嘉台の後ろ側から市街地があり、海には日本へ向かって出発する使行船が待機している。使行船には使行一行が乗船する3隻があり、各船には荷物をのせる従船が各各1隻毎についてあり、総6隻として船団を構成する。渡海船は新しく建造する場合もあるが普通は慶尙左右の水営に属する軍船を利用の場合が殆んどである<sup>2</sup>。その他、永嘉台の入口の豆毛浦には対馬の護行船6隻と船団を前から誘導する案内船2隻、総8隻が待機していて、いっせいに対馬を向かって出発する。

当時の状況に関する理解のために「燕行圖」と「槎路勝區圖」から、いくつかの画を紹介する。



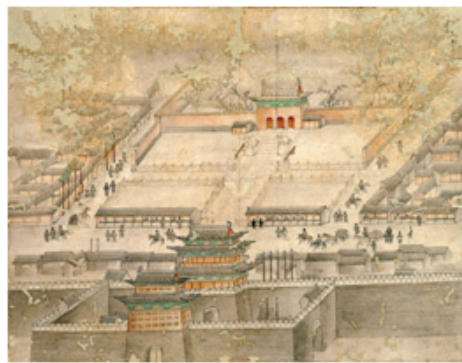
[図 8] 万里長城



[図 9] 紫禁城太和殿



[図 10] 紫禁城 未詳



[図 11] 保和殿 未詳

<sup>2</sup> 「槎路勝區圖」の[図4]の渡海船と同一の船が慶應大学図書館に所蔵されている[図5]の船である。渡海船は通信使派遣の時にたまには製作することもあるが、通常であれば慶尙左右の水営に所属する軍船を利用する場合が一般的である。軍船の場合、設計上の変化はあまりなかったのである。資料を総合してみると、軍船の製作は堅固性に重点を置いたようである。





[図 12] 榎路勝區圖 大坂城



[図 13] 榎路勝區圖 淀浦



[図 14] 榎路勝區圖 津和



[図 15] 榎路勝區圖 入江戸

今まで見たとおり漢陽から北京、そして江戸を連絡し合うこの道は清、朝鮮、徳川幕府三国を結ぶ幹線として、当時としてはホットラインであった。いわゆる政治、経済、文化を伝達する大動脈であり、一方では緊急時北京から、或いは江戸から起った事件が一月で漢陽を経由でそれぞれの地へ伝わったという。従って、この道を三国を連絡し合う文明の道、貿易の道であると名付けたい。

### 3. 異文化の受容と朝鮮の朱子学

#### 1) 小中華思想と夷狄の国

朝鮮は中国大陸から明が亡びて清が建国すると自ら自分を中華文明の嫡子だと認識する。このような文明優越主義的な小中華思想は18世紀前半まで表出されるが、18世紀後半に入ってからには一部在野の知識人の間で清の乾隆・嘉慶期の燦爛な文明の実象を見ようとする動きが起こる。すでに丙子(1627)・丁卯(1636)2次にわたって清との戦乱により朝鮮は表面的には清の要求に従って冊封体制を受容したが、内面的には首肯しなかった。従って清に送る公式文書以外の私文書には清の年号ではない明の年号をそのまま使用する等、屈折した心理現象を現わしていた。

このような対清観は社会全般に拡散されていた。明代の文文学者らの中から明に義理をまもらず、清朝に協助した人物に対してはその学問の高下をとわず、忌避する現象が彭排した。殊に、燕行使として北京の宿所である会同館に留まりながら清朝文人らと明との義理問題で論争をすることも茶飯事であった。結局、これが外交的な問題にまで飛火することになる。清朝初期には会同館の外部人の出入は比較的自由であったが、この問題によって外部人士らの出入を厳格に統制することになっ

た。

しかし、たまにはそれに拘わらず、朝・清文士らの交遊・世交関係は子子孫孫の代代につなぐ学問的交流と友誼を深める場合が多くあった。1712年燕行の道に出た金昌業(1658-1921)と1782年、1794年2回にわたって謝恩使の副使、正使の任務を果たした洪良浩の場合がこれに該当する。

金昌業は1712年兄である金昌集(1648-1722)が謝恩使の正使として燕行の道に出ると随行員の資格で北京へ行って帰るようになる。この時の旅行記である金昌業の『老稼齋燕行日記』は燕行録の白眉といわれている作品である。兄弟6人の内、金昌集、金昌協、金昌翁、金昌業らは文名が高く、官吏として、又、名文家としての名望も高い。これらの兄弟の詩を編んだ『金氏聯芳集』は浙江の文士寧水楊澄の序と詩評を付けて出刊し朝鮮と中国で膾炙された。当時金昌業と清朝の儒者李光地との出会いは一大事件であった。金氏一家と中国文士との交遊は金氏兄弟の当代だけでなく、古くは曾祖父である金尚憲と明朝末年の御使である張延登一家との出会いから、玄孫金益兼と金日進、そして5代目の孫である金在行にまでつづき、浙江と杭州の文士である陸飛、嚴誠、潘庭筠にまでつづく。殊に張延登は魚洋王士禎の外祖父である。張延登は金尚憲(1570-1650)の『朝天錄』に序刻を附けた。

王士禎と朝鮮後期の四家である李德懋、柳得恭、朴齊家、李書九等らとの出会いもここから始まる。王士禎が『池北偶談』、『感旧集』の両文集に金尚憲の詩を引用したことも、『清陽文集』を対照し考証を加えたこともやはり世交関係から始まったことである。又、洪良浩(1724-1802)と清の礼部尚書であり、四庫全書の総撰官である紀昀と、その祖孫らとの交遊も代代につづいた。殊に洪氏家の使行は1647年の謝恩正使である洪柱元から始まり、1850年の謝恩副使である洪輝石にまで100余年の間、燕行に参加しながら清の文人・官吏との交分を重ねた<sup>3</sup>。

一方朝鮮職人らの名分重視の朱子学的な対清観とは別に、活気を帯びたことは仲介貿易である。燕行を通して訳官と商人が主導した公貿易と私貿易その外に、国境の周辺から官吏らの目をさけた密貿易も行われていた。すでに言及したように、17世紀初めの朝鮮が直面した大きい問題は経済的な窮乏問題であった。戦乱によって激減した人口問題も大きい難題であったが、戦争賠償のために支払うべき歳幣もまかなうのが難しいほどの難題であった。これを打開することができたのは清からの歳幣減税もあったが、清と徳川幕府をつなぐ仲介貿易が大きい役割を果たしたという<sup>4</sup>。

一方、朝鮮人らの徳川幕府に対する認識はどうであったか？ 徳川幕府もやはり朝鮮人の華夷観から例外ではなかった。友好と親善という名分論とは別に朝鮮人らの

<sup>3</sup> 牛林傑、「誇文化交流与文化誤読」、2006年10月国際日本文化研究センター第29回国際研究集会発表論文

<sup>4</sup> 柳承宙、「朝鮮後期朝清貿易小考」國土館論叢 30、1991年の引用部を、柳承宙・李哲成『朝鮮後期中國との貿易史』景仁文化社、2002年から再引用

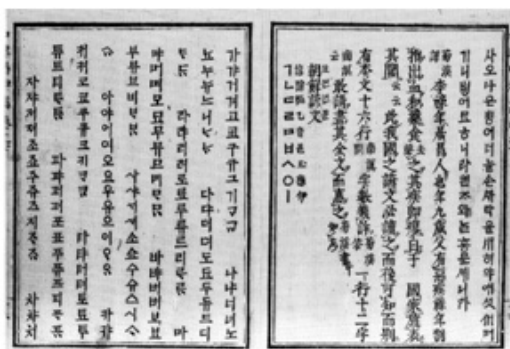
内面には「礼」がない、文明が低い国として認識していた。従って通信使の派遣の名分は日本の文明を高めさせるためのものであり、使行を通して「懐柔」と「教化」をさせるべきであるといっている。しかし、18世紀の半ばを過ぎると朝鮮人の認識にもすこし変化が起きるようになる<sup>5</sup>。

先ほど少し言及したが、1655年の通信使派遣の時から文事(文化)を担当する書記を3人ほど補っている。これらの役割は形式上は正使、副使、従事官の文事に関する補佐役になっている。しかし、彼らの主な仕事は日本文士との交遊である。日本が通信使を通して朝鮮文化を熱烈に受容しようとする時期は第10次の1748年使行の時まで持続されていたようである。この使行を契機にそれまでの熱気はどんどんさめるようになり、1764年の第11次の使行の時には関心がうすくなっていくことが現われていたように見える。

## 2) 朝鮮の朱子学と仮名草子

東北アジアの文化文明を論ずる場合漢文学、又は朱子学を論じないわけにはいかない。しかし、これに関する論議は紙面の関係上、又は論議の対象の範囲も広いためここでは言及をさける。1719年の第9次使行時大坂の使館で製述官である申維翰と三書記、そして大坂の文人鳥山通徳(1687-1729)の門人である入江若水、池田南溟等7、8人との2次にわたった出会があった。その時の唱酬を集めて1721年3月貫道軒から『和韓唱和集』(2巻 1冊)が刊行された。朝鮮側の文士は申維翰をはじめ3書記、姜栢、成夢良、張應斗と稗將鄭后僑、写字官、鄭世榮、医員白与銓、李日芳等と日本側では鳥山通徳入江若水、難波如砥、高井觀天、田中琴山、東鳳国、北山清洲、宮崎仲卑等等が出会った。第1次は1719年9月4日から9日まで、第2次は帰路の11月4日～10日間の7日間の間に出会い唱酬の場を拵えた。

『和韓唱和集』(下巻)を見ると池田南溟が唱酬の席から次のような文件を出見せながらこのようにたずねた。



[図 16]

<sup>5</sup> 申維翰の『海游録』の「海神祭」の祝文と、丁茶山の「日本論」(興猶堂全書第一集十二巻)でこれを言及している。

余嘗聞貴邦書中、有如此字、或曰是貴邦通俗之文字也、今書所記得數十字矣、請以楷字示之 幸幸……

ハングルで書かれた文件である。

니록련이논거창스르미라나히아홉서래아비사오나온병어더늘손까락을버허  
약애섯 썬머기니병이도호니라열즈와늘홍문세니라。

これを見て一行の中の一人である従事官の書記、菊溪張應斗(1670)が次のように漢訳してかえした。

李祿年居昌人也 年九歲父有惡疾 祿年割指出血 和藥食去聲之 其疾即瘳  
白于國家 旌表其閭 云云。〔年は原文のまま〕

ついでにハングルの字数は "一行十二字"といい、字母表も書いて渡した。

도 선 언 문  
朝鮮 諺 文  
ㄱ ㄴ ㄷ ㄹ ㄺ ㄻ ㄼ ㄽ ㄾ ㄿ  
億 隱 極 乙 音 邑 玉 應 伊

가 가 거 거 고포 구 구 구 기 마 ㅁ  
나 나 너 너 노 노 누 뉴 느 니 ㄴ  
다 다 더 더 도 도 두 두 드 디 ㄷ  
라 라 러 러 로 료 류 류 르 리 ㄹ  
마 마 머 머 모 묘 무 뮤 므 미 ㅁ  
바 바 버 버 보 보 부 뷰 브 비 ㅂ  
사 사 서 서 소 쇼 수 슈 스 시 ㅅ

張應斗と池田南溟、二人の間の対話を見ると、大坂の市中でハングルが関心の対象になったようである。同じ時期、名古屋の文人らの唱酬集である『客館瓊漿集』(1720年間?)にも、ハングル字母表が載せられてあり、その信憑性を加えている。

のみならず、天理図書館古義堂文庫に1714年、伊藤東涯の自筆で書いた「ハングル字母表」がある。識語に「正徳四年甲午伊藤長胤從秦種寛氏借膳本對州雨森氏所伝」と書いてある。

池田南溟が問議した短い形態の小話は実は、『續三綱行實圖』孝子篇の「祿連療父」条の例話である。これが日本の翻刻本ではなく、朝鮮刊本が日本市中に流布していたのである。池田南溟が所蔵していた「祿連療父」条の朝鮮本は、初刊本ではない重刊本と一致している。朝鮮朝は『續三綱行實圖』(1514刊)を刊行する前に『三綱行實圖』(1434刊)(孝子、忠孝、烈女各各105人収録)を国家事業として刊行して広く読ませた。

その後、再び縮約本105人の『三綱行實圖』の刊行につづき『續三綱行實圖』、『二倫行實圖』、『東國新續三綱行實圖』、そして『五倫行實圖』にまでおよび、朝鮮朝後期にまでつづいて普及した。殊に、これを学校或いは書堂の必読書として指定して試験科目として実施した。『三綱行實圖』類と共に各種教訓書である『内訓』、『戒女書』、『女四書』等も国民教化及び道徳心向上のために教訓書として広く読まれた。のみならずこれを実践した人には、旌閭門を建てて表彰し、各種の税金や賦役からの免除等、儒教の倫理・規範を通して理想国建設を実現しようとした。

一方、この『三綱行實圖』類がいつ頃徳川幕府に伝播されたのか? 多分、壬辰倭乱の前であると推定される。

林道春が訓読点をうち『和刻三綱行實圖』(名古屋 蓬左文庫)を刊行したのは1630年である。この時、和刻本の底本にしたのが『刪定 三綱行實圖』(105人本)であり、しかし、どの地方の板本かは確実ではない。しかし1490年に編纂したものを底本としている。その間、日本での研究も330人の本の『三綱行實圖』ではなく、105人本をテキストとして 研究が進められてきた。その他、天理図書館が所蔵している『和刻三綱行實圖』(6巻)は1660年に刊行したもので、蓬左文庫の板本とは違う。その他『ひらがな 三綱行實圖』(9冊)と東京教育大学図書館本『和譯 三綱行實』、浅井了意の『孝行物語』、『新續列女傳』(3巻 3冊。1654年刊。有朋堂文庫)等等が翻刻、また翻訳された。

この『三綱行實圖』、『續三綱行實圖』類の例話は、中江藤樹の『鑑草』(6巻 1647年)、山崎闇齋の『大和小學』(3巻 1661年)、浅井了意の『堪忍記』(8巻 1659年)、辻原元甫の『女四書』(7巻 1656年)等等は、『仮名草字』の作品に原形がそのまま採録されている。これらを約400余種に至る『仮名草字』の作品分量に比べると、微微たる数値だといえる。しかし、それがあたえる波及効果を勘案すると大変大きいだろう<sup>6</sup>。

徳川幕府は、朱子学を政治の指導理念として取り入れた。永い間、戦乱による混乱相を正しくおさえながら体制を安定させるためには、朱子学より良い政治理念はなかった。君は君らしく、民は民らしくすべきであるという統治者と、民との役割分擔的倫理道徳は、当時代の現実では必要な理念であった。知識人や武士らの理念、倫理道徳、さらに徳目を教育するためには『性理大全』、『四書三經』等は、すぐ

<sup>6</sup> 崔博光、「朝鮮通信使と日本文學」、『「三綱 續三綱行實圖」を中心に』、大東文化研究、成均館大学校、1988. 4

にでも手に入れることができる、しかし庶民には朱子学的徳目と倫理道徳を教えて教化するためには難しい本よりも、啓蒙的教訓書がより効果的である。従ってこの時期に『仮名草子』と同じような教訓書がたくさん読まれる契機になったのであろう。初期朝鮮で『三綱行實圖』の編纂動機となったのは、尊属殺人のためである。この事件は、世宗大王が朱子学をもって理想国家を建設しようとする理念とは正反対の事件である。従って、国民教化と善導のために編纂することになったのが、この『三綱行實圖』であり、1434年に刊行して頒布するようになった。しかし、それ以前から伝えられてきた各種教訓書もあった。初期の『三綱行實圖』の例話が中国の史書と説話に偏っており、現実性が稀薄であるために『續三綱行實圖』、『東國三綱行實圖』が、各各刊行されるようになった。『東國三綱行實圖』に至ると、完全に朝鮮の例話だけを集めて編まれるようになる。以上から見るように『三綱行實圖』の例話が中国歴史上典型となった人物を『三綱行實圖』類の例話として採録した。この典型となった人物らを再び『仮名草子』に採録して、徳川幕府の理念と徳目を実現する人物の典型として形像化しようとした。たとえ受容上三国に於いて色々違う点があったとしても朱子学の世界観という同質的文化現象の中で典型化された人物らを比較、検討の場になったといえる。

#### 4. 文化の発信者と転信者としての使節

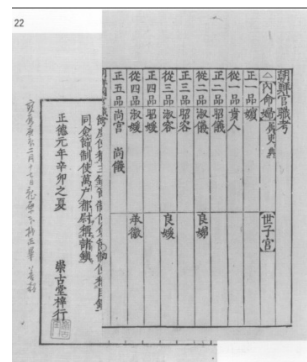
##### 1) 朝鮮の文人と古義堂

通信使聘問時に唱酬した尨大な唱酬録が韓・日両国に放置されたまま山積している、それほど数多い唱酬集の間答中、徳川幕府に於いて学問として一家を遂げた人物に対する言及を見ると、大概、東都には荻生徂徠、西都には古義堂の伊藤仁齋父子が推尊される。ここでは紙面の関係上、東涯と使行一行との交遊に焦点を合わせて言及しようとする。

伊藤東涯と朝鮮使行一行との関係に関して言及する前に天理図書館所蔵古義堂の文件の中から先ずいくつかの点を紹介する。



[図17] 紹述(東涯)先生之肖像



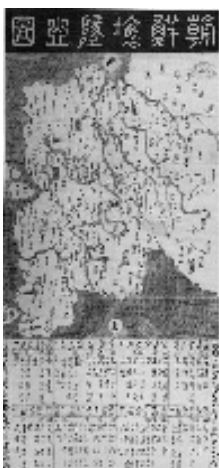
[図18] 朝鮮官職考 1711年刊  
東涯・東所手沢本



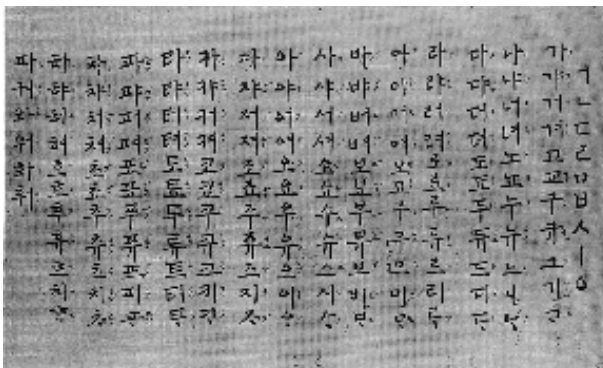
【図19】『三韓紀略』写 (1704~1711) 頃 東涯の自筆  
東涯の朝鮮学の集大成だといわれ  
る一種の小百科典



【図20】『經國大典』写 1690年東  
涯筆  
萬曆31年朝鮮刊本から東涯が書写  
したもの

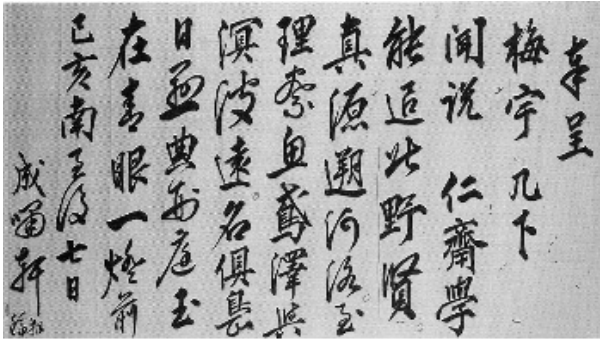


【図21】朝鮮壤墜之圖 1686 東涯 筆写本

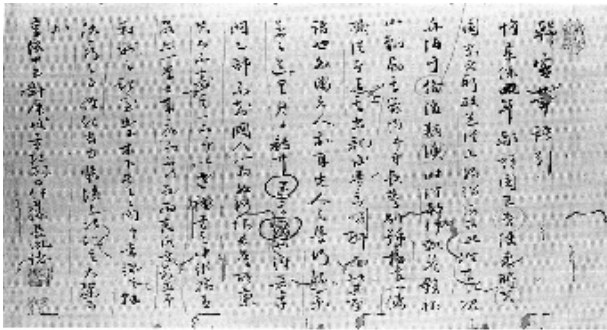


【図22】反切本文 1714年 東涯自筆  
「正徳四年甲午伊藤長胤從秦種寛氏借騰本對州雨森氏所伝」の識語がある





【図 23】 成夢良 五言律詩 自筆



【図 24】 『朝客筆語』に附けた 東涯自筆の引 1730 年

※【図17】～【24】は天理図書館が開館五十八周年を記念して作った図録『朝鮮通信使と江戸時代の人々』から引用した。この場を借り厚くお礼申し上げます。

図17から24までに見るように、東涯の学問の領域と専門性その外に、朝鮮学に関する幅広い専門家だとすぐわかる文件である。詩文に関してはすでに、多くの研究成果があって、ここでは言及しないようにする。殊に『三韓紀略』は彼の韓国学研究の集大成だといわれている。それにふさわしい百科全書的な分野を、専門的に穿鑿した点が高く評価される。要するに1714年には韓国語を専門的にならようとハングル字母表も筆写した。また朝鮮の法典である『經國大典』を筆写して随時、参考にするなど、ここからも彼の学究的姿勢がより目立つ。彼の言及のように生涯に通信使を3度目に迎えたという。それほど彼にとって通信使の影響は大きかったのだろう。

先ず、東涯と使行一行との交遊である。これに対しては、いろんな資料があるが、その中から『韓客筆語』がより客観性を持っており、一目瞭然に識別できるようなものである。

『韓客筆語』には東涯が1730年に装幀したもので、その装幀の前と後に序と跋文のかわりに引と詩を附し、そして梅宇と成夢良、申維翰らが唱酬した文件を直筆そのまま編んだものである。「韓客筆語引」には、東涯の間議、梅宇と成夢良との出会い、『童子問』等に関する全過程が仔細に記述されている。

東涯は1719年に第9次通信使の訪問の消息に接すると、先ず備後州福山府の儒者

職に就いている弟の梅宇(名長英、1682-1745)に通信使一行に、次の7ヶ項を問議することを付託する。

一。慵齋叢話。不著撰人名。跋云成文公所著。予伯氏曰。東文選中有成侃慵夫傳。

恐即是人。不知是非。

一。貴國之書多傳于本邦。攻事最要畧敘 貴國大王 世次。書成 于嘉靖中。故自是而後不知載。吾文祿之時 貴國大王諱日旁從公 其後人旁從宗 日傍從軍。

廟号諡号如何。在位年數多少到今 大王知是幾世。幸蒙 報知。

一。吾明曆壬申來聘之次。李石湖學士携來東人詩話。來今刊傳于世。

此回一行諸官員亦齋到奇書不。若有副本幸不悞惠投 或冊數不多速騰奉還。

一。貴國書有看多介匠者。是造 何等物 又有 荷葉錄匠者。海東諸國記 中云。

本國周防州有 荷葉錄。未 審為 何物。幸蒙 告示。

一。辛卯歲來聘一行諸官員皆無 恙否。李學士并三書記皆健在否。

予時在 京邂逅學士于行館忽擾之中。風流文采宛尚在目。

一。神主題式。本宗四世考妣文公家禮中具有成法。

旁親自弟妻侄及諸卑幼諸書不 載 其法。貴國密邇中夏。素稱 禮儀之邦。凡此諸式想其有 成法并明清人所書 其法 如何。幸蒙 教示。

一。中國今亦有聞人否。陳延敬徐乾學汪琬等文字束來。列位亦識 其人 否。

一。懲毖錄不著 撰人。壬戌之歲 貴國人云。柳氏成龍所著。或云武備志中云。

柳求寵即其人也。然否

これに関して成夢良は次のように答える。

一。慵齋叢話即我國成侃所 著。成侃号 慵齋。一号 虛白堂。成侃号 真逸齋。

慵齋之弟也。二公於僕為 族祖。

一。東人詩話即徐四佳居正所著也。今行。別無 奇書齋來。

一。荷葉錄即鑰銅器上所 生綠也。我國以 此為 樓閣丹青之資。

一。辛卯歲來聘一行諸官員皆無恙否。李學士并三書記皆健在否。

予時在京邂逅學士于行館忽擾之中。風流文采宛尚在目。

一。神主題式。子 則題 曰 亡子某神主。 妻則曰 亡室某氏神主。

弟與 姪若無 後斑附則亦稱 亡弟亡姪。此規我國、士大夫家通行。

皇明儀禮亦不出此規。

一。中國今世間有需霖為名以學名世知。尊朱子云矣。

一。懲毖錄即柳西涯成龍所譜。<sup>7</sup>

7項に関する問議の内容は、多様の分野にわたっている。即ち、漫筆形式の慵齋叢話、新羅期から朝鮮初期までの詩話集である東人詩話と東文選、一種の技術書籍である荷葉緑、神主題式、即ち祭祀の時の礼式に関すること、中国に於いての現今に至るまでの開人、壬辰倭乱の時の戦乱に関し、記述した海外流出禁止書である懲毖緑等等、多様な内容である。これは何よりも朝鮮に関する東涯の幅広い学問的関心と、専門家的素養を計ることができるところである。東涯が梅宇を通し問議した文件に関して彼の随筆集『秉燭譚』の「慵齋叢話ノコト」に次のように記述しているのを見ることができる。

朝鮮ノ作ニ慵齋叢話ト云書アリ。先考生存ノ時、小河氏ヨリ写本伝来ス。ソノ中サマザマノ事オシルセリ。羅山集ニモコノ書ノコトアリ。跋ニ吾座主成文公トアリテ、名ヲアラハサズ。東文選ニ成侃が慵夫伝アリ。コノ人ナルベシト想ヘリ。享保元年三韓ノ使来聘シ、備後ノ鞆ノ津ニ泊レリ。時ニ予弟長英福山阿部侯ニ仕フ。鞆ノ津ハ侯ノ領内タルニ因テ、使人ニ接談ス。成均館進士成夢良ト云モノニ、コノ事ヲ尋ヌ。叢話ハ成侃ト云モノ、著トコロナリ。成侃ハ号ス慵齋ト、一号<sup>8</sup>

梅宇と成夢良との出会いは、1719年11月18日夕方、使行一行が帰路鞆浦に入港したときである。二人は使館で出会い、あいさつが終わると梅宇は五言律詩一首を夢良に贈呈する。

萬里修交聘。迢迢向日行。海程因本道。鼓吹和濤聲。聞說詞華富。

定知經術明。觀風吳季子。不墜使乎名。

成夢良もまた、梅宇にあいさつを重ねて次の詩をもって回礼する。

花宮臨大壑。形勝擅寰瀛。簾外鰲山色。枕邊鮫杼聲。

擁炉三影會。對榻一燈明。襟袍元相照。何勞問姓名。

<sup>7</sup> 『朝客唱酬録』によると8個項目に関し問議している。しかし、『韓客筆語』装幀本を見ると、7個項目で、それもメモ形の要旨である。『朝客唱酬録』の第2項ははじめからなかったが、後日添加されたようである。又、『朝客唱酬録』第2項の「攻事最要」は誤字であり、『攻事撮要』である。魚叔権が撰した本で後日増補版が刊行された。

<sup>8</sup> 伊藤東涯、『秉燭譚』「慵齋叢話ノコト」

ついでに成夢良は、伊藤仁齋の日本儒宗としての名声はすでに知っておるといい。仁齋の辨性理書を朝鮮に持ち帰り人々にお知らせしたいと申す。これに対し、梅宇はそれは先人の望みであり、先人の著書である『童子問』を雨森東にたのんで伝えるという。

曾在 本國 慣聞 藤人齋 蔚為 日東儒宗。思欲 望履 門下 一聞性理之說。  
今獲 私 於執事实 仁齋之胤也、其為忻幸 如何。先公論 辨性理  
書必有 家藏。伏望逐 平昔尊慕之意 且使歸示 本國學者 以知 貴邦儒風之  
盛。如何。

承先人之卑名。足下嘗於 貴邦 聞之。推賞殊渥。平素所 言論 聚為 一書。  
名童子問。明日託 芳州公(宗對州公之儒臣雨森東五郎 云)致之。  
幸傳 貴邦 先人之志願足矣。

成夢良はそのようにすれば、日本に道学があることを朝鮮に広く知らせるといふ。ついでに梅宇は、すでに言及した東涯の付託を問議する。回答をえた梅宇は、夜がおそくなっていると礼をのべる。成夢良は、われわれは明日には別れるから、余情を禁じることができない、もうしばらく留まることをすすめる。その後彼は、次の詩(〔図 22〕)五言絶句一首を贈呈する。この詩には、仁齋と梅宇に関する最大の讃辞を込めている。

聞説仁齋學。能迢 北野賢。真源溯 河洛。至理察 魚鳶。澤與溟波遠。  
名俱 島日懸。典刑庭玉在。青眼一燈前。

梅宇も又、一首を作り謝礼をする。ついでに製述官申維翰にも七言絶句一首を伝えてくれるよう頼む。申維翰が梅宇の詩を受け取ったのは、鞆の浦ではなく忠海からである。この詩を最後に梅宇と夢良二人の出会いは永遠に終わる。しかし、父親伊藤仁齋の『童子問』は、朝鮮で成夢良のいうとおり朝鮮で広く知られるようになる。

江頭傾 蓋文場會。懷抱知君海水深。解 纜錦帆明日去。百年難 得對 清襟。

申維翰に贈呈した七言絶句である。

国寶百年方善 隣。星槎万里掛 天邊。觀風知有 還游賦。聞説從來筆若 椽。

忠海から梅宇の詩を受け取った申維翰は、船が出港する直前に回答詩を作り、有難い心を伝える。又、忽忽とした心で回詩を作ったことを手紙の末尾に書き、梅宇

に送る。

孤雲獨鶴與 為 隣。落月空汀繫纜邊。  
何處素琴傳 別調。古梅香裏屋三椽。

僕姓申 名維翰。字周伯。号 青泉。乙酉進士。癸巳狀元及第。  
官至秘書閣著作。行年三十九。萬里乘槎。往來道途皆於貴館下經宿而參差  
一會 期亦自有數恨。如之何朝從嘯軒成君。奉惠韵朗誦之正。欲薄言下渚。  
而船又忽忽發 奈何。

この詩を最後に唱和は終わる。しかし『韓客筆語』の最後には、東涯の七言古詩一首が終わりを装飾している。詩のはじめに「享保己亥之冬、朝鮮使客過備之福山面。弟長英求請先人之遺書」の記がある。この詩は、紹述先生詩集七言古詩条にも載っており、1720年の作である。

萬里星軺自三韓 隣好百年盟不寒 候人前期飾亭  
館 縣次續食禮數寬 吾生三逢過都下 冠裳濟濟慕  
諸夏 海青皋比充庭實 駿馬豁鼻真泛駕 五十三程  
赴關東 彩旗獵獵捲秋風 文人才子爭投贄 心照神  
交尺楮中 復路還日迨一陽 浪華津口已開洋 有弟  
抽毫宦備藩 邂逅記室成夢良 先人風聲播殊域 慙  
慙修刺訪潛德 遺書一帙代縞紵 夙志喜傳箕子國

伊藤仁齋の『童子問』が朝鮮に伝えられるようになった過程と感激を詠んでいる。又、その契機を作ってくれた弟の梅宇に有難い心も披瀝する。先ず、来聘の意味と目的、真心込めた歓迎人波の様子、本人が経験した使行の回数、そして行次の偉容等を歌っている。また江戸へ至るまでの沿道からの両国の知識人らの交遊と帰国の時の情況にまで歌った後、『童子問』が朝鮮に伝えるようになる、成夢良と梅宇の出会いのことと、そして仁齋の学問的名声が、まさに国内だけではなく、外国にまで伝播されることに関する自負と感激が淡淡と披瀝されている。何よりもなんの修飾語もなく、写実的な一幅の画をみるように歌っていることが特異である。

伊藤仁齋の『童子問』が朝鮮に伝えるようになったのは 1720年であったが、実際に膾炙されるのはもっと後のことである。日本の学者に関する言及は、18世紀初め頃に活躍した李瀾の言及があった。しかし、彼の弟子である順庵安鼎福(1712-1791)に至ってより具体的に言及されている。彼の隨筆である「橡軒筆下」で伊藤仁齋の『童子問』を見た、“海中の夷狄の国で学問をする人がいるとは考えら

れないことである”と賞賛している<sup>9</sup>。彼より後学である丁茶山(名。若鏞、1762-1836)に至ると、仁齋以外にも荻生徂徠、太宰春臺の学問にも評価している<sup>10</sup>。

一方、1764年使行時の書記として聘問した成大中、元重舉、金仁謙等がある。彼らは洪大容、朴趾源等と交分が厚く、学問的性向も共にする同じグループに属する。成大中は、成夢良の生姪である。元重舉は帰国後、日本に関する著述である『和國誌』(3巻)を著し、元重舉と姻戚関係である李德懋もやはり彼の尠大な著書の中で、日本に関する『蜻蛉國誌』を書いている。洪大容・朴趾源を中心にして 詩社メンバーにもなる李德懋、柳得恭、朴齊家、李書九、元重舉等等、彼らはたびたび出会った。ただ詩会や学問的交流のためではなく、日常生活が同じ空間である漢陽の圓覺寺周辺に居住していた。従って、日常生活を共にしながら学問に関した議論もやった。殊に日本と中国の旅行に関することは彼らにとっては、一生一大の話題である。しかし彼らのメンバーの中には、中国や日本のどちらかの国を、あるいは両方とも旅行した人物らもいた。

従って、彼らはひとところに偏向した視覚よりも、客観的であり、国際的に眼目を持った人士らが多かった。李德懋は「顧炎武と伊藤維禎の性論」(『盞葉集』)で、仁齋を日本道学の儒宗として次のように評価している<sup>11</sup>。

顧亭林は明の末葉の博通して、文雅な 大学者であり、伊藤氏は日本道學の偉い文士である。我が一早く彼の文を読みその人なりを恭敬した、彼らは性を知らないことがこのようであるために、哀れに見て、ここで正しく述べるのである。

明末の顧炎武と、仁齋の学問に関する言及である。李德懋は学問的には二人とも尊敬しているが、性の問題、即ち四端七情の問題に於いては見解を異にしていることを披瀝している。

しかし、李瀛門下の安鼎福の如く洪大容グループの文士たちも徳川幕府の学問的位相と社会全般に及ぶ文化現象に関してはある程度肯定的に評価をしている。彼らの同僚である元重舉、成大中等を通して、日本の実相をよく知っていた点が、大きく作用されたように見える。

伊藤家と通信使使行一行の交遊は、1748年の第10次使行の時もつづく。この時は梅宇の長男である伊藤霞台が福山藩の儒者として、通信使の製述官である朴敬行及

<sup>9</sup> 「椽軒筆下」(日本学者)「順庵全集」巻13

<sup>10</sup> 丁若鏞、「日本論」、『興猶堂全書』第一集12巻

日本は今念慮することがない。私が古学先生伊藤氏の文及び荻生徂徠、太宰春臺の経義論を読んで見るとすべてが燦然して輝いている。文を持って判断すると、その文は非常にぬきんでいる。

<sup>11</sup> 李德懋、「盞葉記2」、『青莊館全書』

び、書記李鳳煥 李命啓、柳近等と唱和をした。この時、霞台は祖父の著述である『論語古義』、『孟子古義』、『中庸發揮』、『大學定本』、『古學指要』等を朴敬行、柳近らに贈呈する。この書籍等が安鼎福、李德懋、丁茶山等に読まれ、さらに彼らにより、伊藤仁齋に関する理解と学問の紹介が朝鮮で行われる契機になった。

## 2) 北学派文士と清朝考証学

小中華的華夷観に自足していた朝鮮文士らに対して実用的な学問を叫びながら清の実相を客観的に直視しようと風を起こしたのが燕巖学派、即ち北学派文人である。北学派文人は燕行から帰国した後、思想と意識に変化を見せる。彼らの中、座長格である洪大容の燕行から始まり、金正喜の燕行まで約50余年の間に彼らの燕行は持続される。いわば1765年洪大容の燕行から始まり、1776年の柳璉、1778年の李德懋、朴齊家、柳得恭、1780年の朴趾源、そして1790年の朴齊家、1801年李德懋(二回目)と朴齊家(四回目)の燕行、1810年朴齊家の弟子である金正喜の燕行にまで約半世紀に近い期間、北学派文人らの燕行が継続し、清の文人らとの交遊が持続された。しかし、もっともピークだった時期は洪大容の入燕から1780年の朴趾源の燕行までだと思われる。洪大容の漢文で書いた『燕行記』は「乾淨筆談」、「乾淨後編」、「蕪南尺牘」、「燕行記」に分けられであり、又、ハングル本である『乙丙燕行録』がある。彼の『燕行記』を大きく分類すると三つに分けられる。

第一、杭州の三人の文人、即ち嚴誠、潘庭錫、陸飛との出会いと問答を集めたもの

第二、北京南天主堂訪問と西洋物見学

第三、彼の哲学と思想の根幹である虚学と実学を論じた『豎巫閭山』

以上のように要約される。が、洪大容の燕行記は北学派文士だけではなく朝鮮社会全般に大きい波紋を起こした。殊に、西洋宣教師らとの出会い、科学器機、パイプオルガン、西洋画、西洋文化に関することである。洪大容の『燕行記』に刺戟を受けた李德懋は洪大容が秘蔵していた尺牘文件と「會友録」から抜萃して朋友の道を明らかにした『天涯知己書』を(1767年ごろ編纂)、柳得恭は『巾衍外集』を、そして北学派文士らの数多くの詩文集に杭州の三文士との交誼の深さを詠じている。

洪大容の燕行に続いて、1776年には柳璉(1741-1788)が入燕する。彼は堂号を幾何学と名付けるほど数学、殊にユークリト幾何学に没頭した詩人であり、数学者である。入燕する前に朝鮮後期の四家と呼ばれた李德懋、柳得恭、朴齊家、李書九ら4人の詩を抄して『韓客巾衍集』と名づけ、これを李調元(1734-1803?)、潘庭錫(1742-?)の序文を受けて刊行する。李調元と潘庭錫がこれらの詩を『四家之詩』と極讚することにより朝鮮後期の四家として呼ばれるようになった。四家らは王士禎の神韻説に大きく影響され、殊に李書九がその中で王士禎の詩風をよく摑得したという。李德懋の『天涯知己書』が柳璉の入燕時の彼の行囊の中に入っており、潘庭錫らとの出会いの時に話題になったように考えられる。四家の中の一人の李書九

を除外した李德懋、柳得恭、朴齊家3人が燕行の道に立ったのは柳璉より2年後の1778年であり、『韓客巾衍集』が中国詩壇に膾炙され始めたその次の年である。李德懋は友であり、後輩である朴齊家、柳得恭(潘陽まで同行)、2人の同行が何より心強いことであつたらう。殊に詩人としてのことではなく、学者としての博学と専門性を遍く備えていた時期であり、学問の本場での清の文士との交遊は彼の一生一大の望みであつた。彼は入燕記のはじめに「いつも中国へ行きたかつた」と吐露している。このような願望は、漢字文化圏の知識人なら誰もが望む願望であつたらう。彼は燕京到着三日目、朴齊家と共に琉璃廠書肆を訪問する。琉璃廠は1773年四庫全書編纂仕事が始まると同時にもっと活気を帯びるようになり、書籍の宝蔵として、全国から出版された書籍の集荷場であり、文人学者らの交驩の場でもあつた。殊に燕行の道に立った朝鮮の文士らにとっては南天主堂と共に観光名所の一所でもあつたが、新知識を習得するための産室であつた。二日後、彼は物品購入担当者である乾糧官を帯同して再び琉璃廠を訪問する。当時琉璃廠の左右には29軒の書肆<sup>12</sup>があつたが、その中の12の書肆で彼は朝鮮が輸入しなかつた稀貴本の目録を作成して、それらを後日、朝廷の購入用書籍を書状官の代わりに五柳居書肆で購入する。

この時購入した書籍の中には禁書もあり、殊に『圖書集成』の中散帙したものも購入した。その他の仕事は、清の文士らとの交遊である。彼の会つた清の文士としては李調元兄弟と潘庭筠、そして、彼らの紹介で会つた清の考証学派らの文人、主に四庫全書編纂に参加した小壮学者ら、即ち、紀昀、祝徳麟、沈心醇、唐采宇、查馥等であり、彼らとの友誼を深めた。李調元、李鼎元、李驥元、三兄弟との出会いは、『韓客巾衍集』から始まる。しかし、李調元が李德懋に膳物として送つた落花生の生態・栽培法の問いのために相互に往来した詩文を通して交遊はもちろん、考証学的方法論が自然に彼に伝わってくる過程を辿る。

落花生は李德懋の代に伝わり、その孫である李圭景に至つてようやく栽培に成功するようになる。この過程を李圭景は「落花生 辯證説」に具体的に記述している。彼の百科全書的な著書、『五洲衍文長箋散稿』の「落花生 辯證説」によると彼が直接植えたのは失敗し、1830年に栽培したという人がいるが信じ難いという。彼が直接確認したことは1836年世交関係がある徐有渠の農場で栽培したもので、種子数十個をもらい、彼が直接植えてみたと言う。落花生によって清朝考証学が自然に受容される過程を見せてくれる文件として、面白い文化伝播の様相であると言える。柳璉によって結ばれた李調元との縁が又、四家らに続いてあり、殊に朴齊家と李鼎元は同じ年齢という理由もあり、友誼がもっと敦篤した。彼らの出会いは1810年に金石学で一家を遂げた朴齊家の弟子である金正喜の入燕にまで続く。

このように北学派人士らの系譜を通して清朝考証学との關聯性がより大きいこと

<sup>12</sup> 藤塚隣、『清朝文化東傳の研究』によると琉璃廠が開設されたのは清のはじめ頃である。李文藻が書いた『琉璃廠書肆』によると街の左右には29軒があつたという。



を調べられる。燕京をたずねていく人々にとって、南天主堂は誰でも関心がある対象である。洪大容の燕記にはすでに具体的な言及があり、そのために殊に関心の対象になったと斟酌される。しかし、単純な好奇心の対象を越えて西洋科学の窓口という点で李德懋に注目される。李德懋と朴齊家は二度にわたって南天主堂をたずねる。第一回目は守直する人がいなかったのも南天主堂の周囲だけを見学する。二回目の訪問の時にも欽天監官である宣教師は入直次圓明園に入っておらず、守職する漢人がおり、南天主堂の内部を見ることができた。しかし西洋楽器と機器が置いてある2階は主人がいないという理由で入室が許されなかった。従って李德懋と宣教師との出会いと西洋機器の見学はできなかった。しかし、教会内部の壁面に描いてある聖画と油画に関しては非常に彼に感動をさせたと言及している。天井はドームの形態で丸く、壁には子供を抱いた女人の人物画を描いてあったということから聖母マリアということであろう。そして正面には天主耶穌と耶穌之母の左右には十字架に懸けた子供とその子供を受ける様子もあった。非常に恍惚として、又、幽怪にしてあまり良い思いを起ささせるものではなかったと書いてある。又聖堂では司祭館に出る複道にかけてあった黒い犬の画は実際の犬と全然区別がつかないほど実物のように描いてあるという。李德懋は他の著書でも天主教に関する言及はあまりない。たとえ西学に対する関心は表明してはいても、宗教的な面ではない、純粋な学問的な好奇心にすぎない。いわゆる博物学者としての好奇心と関心、その対象としての本質糾明のためであろう。しかし、同僚である朴齊家が主張するような経済力向上や科学技術を通じた生活向上、或いは実際の生活に於ける実用性に関する面は見られない。あくまでも学問としての領域への接近にとどまっている。いわば清の考証学的方法、神韻説などが彼を通して朝鮮に受容されたといえる。

1780年の朴趾源の燕行記である『熱河日記』は燕行文学の白眉だといわれる。それほど興味と問題点を提示したものである。すでに同僚、後輩、弟子らの燕行があった後のことであり、彼は燕行の時に必要な準備に万全をはかることができた。彼は伝統的な文体とは違う破格的な敘述でその日その日、起こったことを興味津津に記述しながら、一方では名分論と華夷論的世界観に埋没されていた支配層に辛辣な批判をかえたのである。そのため彼は文体反正という嵐風にうたれた。しかし彼の行動は変革という時代の要求を導くには至らなかったが、正しい方向を提示したと思われる。

朴趾源が清の文物に接し、感じたことは車輪の利用、煉瓦の使用、こわれた瓦の再活用、糞尿を肥料として再び活用する問題にまでわたっている。いわゆる生活向上のためには機械と商品を開発すべきであると、即ち利用と厚生を通して富国ができるというのが彼の主張でもある。この主張は朴趾源をはじめ北学派文士らの一貫した主張である。朴趾源と清朝の考証学者らとの出会いはすでに言及したので、ここでは付け加えないことにする。但し、熱河から見た北方佛教、黄教に関する言及は、彼の世界史的認識の一断面を理解すべき点に至っている。

## 5. 平和と文明圏の形成

### 1) 東医宝鑑と実証漢方医学

近世における東北アジア漢方医学界に大きい波紋を引き起こした漢方医学書のひとつが『東醫寶鑑』である。書名のとおりに漢方医学書の宝鑑として当時は勿論、今日にもその名声は不動の位置である。

この本は1596年朝鮮国王の命により許浚(?-1615)と他の医員らが共に編纂作業を始めたが、1597年丁酉再乱のために中断され、その後、彼一人の力で、15年にかけて、1610年によく完成させた。内医院(王室内の医療を担当する部署)から印出(25巻 25冊)し、1613年に訓練都監から活字で印刷した。朝鮮は勿論、清本の凌魚の書にも「天下の寶」だといひ、日本翻刻版の源之通の跋にも「医学の秘笈」であると記している。<sup>13</sup>

許浚は『東醫寶鑑』の編纂に対して伝統的に伝来してきた医学書を可能な限り、参考にした。中国の医学書である『醫方類聚』、『郷薬集成方』、朝鮮の楊禮壽の『醫林撮要』の外、医学書230余種に至る。

これを総合して臨床に根幹を置いた実証的、学理面の記述に重点を置いた。又、本草学、さらに保健医療学に関することまで含めている。殊に彼の臨床経験をもとにして、従来 of 医書に記述されていることを総合、実証的に記述したことが特徴である。これは彼が経験した凄惨な戦争の中で発生した様々な疾病を処方しながら得た臨床経験の結果である。従って、簡潔で明確な記述ができた。東医宝鑑が今日にも数多くの人々に膾炙される理由の一つは保健医学に関する学理的な面をやさしく記述している点である。『東醫寶鑑』は1613年に行された後、朝鮮では四回にわたって出刊され、徳川幕府と清でも各各翻刻された。

『東醫寶鑑』が日本に伝えられたのは1662年であり、1724年には京都書林から、1799年には大坂書林から各各翻刻された。清に伝えられた時期は不明であるが、1763年皇室倉庫である秘閣に所蔵されていたものを順徳左翰文が翻刻した。1796年には江寧の敦化堂から再刊されて、光緒復刻本は日本の1724年の本を翻刻したものである。その他、上海印本があり、この本を影印したのが台湾影印本である。『東醫寶鑑』は総5篇として、「内景」、「外形」、「雑病」、「湯液」、「針灸」となっている。人体の構造によって内と外に区分して、それによって疾病と処置法を記述している。「雑病」篇は「内景」、「外形」に属しない疾病と予防医学、保健医学をあつかっている。細部項目では本人の意見を提示するより歴代各種の医学書の記述を参考、総合、整理し、これを引用する形で記述している。なによりも従来の多様な意見を総合的に体系化し、これを実証的に記述している点の特徴であるといえる。『東醫寶鑑』は徳川幕府の漢方医らの必読書として読まれた。通信使の訪問の時に

<sup>13</sup> 三木栄、『朝鮮医学史及疾病史』、富士精版印刷株式会社、1963

両国の医員らが出会った時は必ず『東醫寶鑑』と朝鮮人蔘の話題から始まるのが通例である。(『朝鮮國音當百軒筆語』朝鮮人蔘)人蔘は当時において高価な治療の薬として、ことに靈薬として定評になっていたためである。

先ず徳川幕府と朝鮮両国医員らの医談を編んだ韓方医書名を挙げてみる。

- 桑韓醫談 正徳3年刊 二卷二冊、北尾春圃撰
- 和漢人参考 一冊 延享5年刊
- 桑韓鏘鏗録 三卷(「醫談」一卷) 寛延戌辰
- 『桑韓醫問答』 卷三冊 河村春恒撰、江戸醫官 寛延元年 東武刊行
- 『韓槎墳篋』 卷二冊 良醫 趙崇壽
- 『藍島鼓吹』 小野士厚 享保五年 築前醫官
- 『桑韓筆語』 山田正珍撰 東都醫官 寶曆甲申
- 『桑韓醫談』 二冊(整) 北尾春圃撰 正徳刊 (三本)等
- 『雞林唱和集』 卷四 卷五(整)
- 『兩東唱和後録』 一卷(整)
- 『朝鮮人筆談』 一冊(写)
- 『桑韓墳篋集』 十一卷の中、卷三・四・八・九(整)
- 『桑韓醫問答』 三卷(整) 河村春恒撰
- 『善隣風雅附録』 (整)
- 『和韓唱和録附録』 一冊(整) 村上秀範撰
- 『仙槎筆談』 一卷(整) 橘玄動撰
- 『和韓醫話』 二卷(整) 山口忠居撰
- 『倭韓醫談』 二卷一冊(整) 阪上善之撰
- 『兩東鬪語』 二卷二冊(整) 松木興長撰
- 『雞壇嚶鳴』 一卷一冊(整) 北山彰撰
- 『韓客治驗』 一卷一冊(整) 橘口淳撰
- 『雞林醫事』 一冊(現活) 小池正直撰
- 『朝鮮醫語類集』 一冊(現活) 鈴木祐三撰 帝國圖書館
- 『朝鮮人筆語』(1634年)(日本儒醫靜軒 信使 醫白士立との筆談 写本1冊)
- 『韓人唱和産物筆語』(1748年)班荊閒譚(上下)直海先生著 良醫 趙崇壽  
(号。敬老)との筆談。
- 韓館應酬録(1764年)良醫 李 佐國との筆談唱酬集
- 『朝鮮國奇嘗 白軒筆語』

両国漢方医の交遊の場も文人に劣らないほど数多い漢方医が参席して医談に関する問答が交わされた。疾病に関することから学理的なこと、薬材と本草学に至るまでの多様な医談が行われた。ここではその中で東医宝鑑と人蔘に関する医談だけを

挙げてみる。先ず1764年の使行の時に江戸の医官、山田正珍(号。 圖南)と朝鮮良医李佐國(号。 慕庵)との医談のところである。『桑韓筆語』(宝暦十四年 東都書肆写本)から引用する。

二人の間にあいさつが終わり、先ず圖南の問いから始まる。

稟圖南 貴邦人 許浚所著 東醫寶鑑 我國既刊行焉 而有不可識者若干  
左書之 願示其形狀 松魚 俗方 鯉魚 土桃蛇 木頭菜 檳樹 藍藤根가々  
今藍漆云—

復 慕庵 僕 亦未詳其形狀 藍藤 當作藤藍即 蓼藍也 稟圖南 經絡之說…

上記の二人の対話は『東医宝鑑』の〔湯液之卷之二〕の魚部条のところで、そのことが圖南には理解できなかったようである。

次は人蔘製法に関するところである。人蔘製法に関することは漢方医に於いては大きな関心の対象であったように見える。

圖南も慕庵に人蔘製法に関して問議している。しかし、「貴邦之醫、每發此說以是誤聞矣。人蔘決矣無製術乎」と答えている。

1748年の良醫趙崇壽(号活庵、子崇哉)と百田安宅(号。金峰、字。子山、宦名。別平格)との問答集である『桑韓鏘鏗錄』(下卷)の医談からも製法がないと活庵はいつている。先ず、百田安宅と趙崇壽が次のように問答している。

金問 今自貴邦所將 來之參 密製乎生參乎

活答 生耳

金問 湯參云者 如何

活答 湯參云者 採取 時以 熱湯浸洗耳

金問 其色 如何

活答 若不以熱湯洗之 則色黑也

金問 今自貴邦 將來之參 熱湯浸洗之外 別無製耶 殆似于修製者<sup>14</sup>

朝鮮が人蔘を栽培し始めたのは17世紀後半であり、その以前には主に自然産の人蔘を使用した。人蔘加工法には水蔘をそのまま乾した白蔘と、蒸して作った紅蔘加工法がある。紅蔘は中国に輸出するために加工する製法として18世紀後半から始まった。圖南が執拗するほどに製法に関して問議すると慕庵は秘家といいながら人蔘の製法を教えてあげたという。この時、紅蔘加工法は開発されないままであったようである。原来、人蔘は靈藥として加工すると性品を落とすと考えていたようである。

<sup>14</sup> 韓国では人蔘の参を『蓼』で表記するが、日本では『参』に表記する。

両国間の医談に関する論議は臨床と学理的なこと、本草学等等、多様に論議されていた。このような論議を通して医療技術の向上は勿論、病理処方など、質高い医療が可能であったようである。以上のように、東医宝鑑と人蔘は東北アジア三国における疾病と予防医学、さらに保健医学分野におよぶまで関心と研究の対象になった。

## 2) 西学の受容と生活化

朝鮮朝の李晬光(1563–1623)が、1614年に著述した『芝峰類説』は西洋文明に関する言及の嚆矢であるという。しかし、本格的な西洋との出会いは鄭斗源から始まる。彼が1631年燕行使として山東半島の登州から耶蘇教会宣教師ロドリゲス(中国名 陸若漢)が渡してくれた治暦縁起1巻、自鳴鐘、千里鏡各一艇をもらってから始まる。

18世紀初めの実学者として名高い李瀾(1681–1763)は当時を代表する実学者として西学、天主教にも関心が深かった。殊に西洋画にも一家言を持っていた。

当時、朱子学的世界観が風靡する時期、彼は柔軟で相対主義的な思考を持っていた、それは彼の博物学的関心事のためであろう。最近、彼の思想体系から変革の要素があると提起される程、西学との関係が深い<sup>15</sup>。

朝鮮における西洋との接触は学問的なことより実用的な面から由来する。16世紀末、17世紀初め頃に日本と清との戦争で使用した鉄砲と大砲から、その事例をみることができる<sup>16</sup>。

鉄砲と大砲の弾に所用される硫黄と焰硝は自国では調達されないものであり、輸入に依存すべきものである。しかし、これは両国が輸出を禁止する物品である。そのために、調達過程でいろいろな外交的摩擦を起こしたこともある。その弾丸を作るために自主的に硫黄鑛山を開発するようになる。

その他、和蘭人の漂着した事件である。ベルトブレナ(韓国名、朴燕、Jan J. Weltevrete. 1595–?)は1628年、同僚2名と共に漂流してきて帰国せず、韓国女人と結婚して子女ももうけた。彼は訓練都監に所属し大砲を作り、丙子胡乱の時に戦死した。

又、ハメール一行の漂流である。ハメールは1653年に、同僚30余名と共に済州道に漂着した。しばらく後ソウルに移送されたが、再び地方監營の所属になり、1666年に脱出して1668年に帰国する。ハメール一行が訓練都監及び地方監營に所属した

<sup>15</sup> 李瀾の『星湖僿説』によると宣教師らと西学に関する外に西洋画、西洋画鑑賞に関する言及が多い。彼の思想に於いては朱子学の硬直性からはなれて、より柔軟な姿勢と客観性、論理的体系などが見られ、やはり西学との関係が深いといえる。

<sup>16</sup> 壬辰倭乱の初期、日本軍が使用した鉄砲の威力に驚いた朝鮮は戦争中に鉄砲を開発、大砲を改良し使った。通信使の使行の時に日本の大坂の市中でうっている鉄砲を買って帰国する場合もあった。18世紀中葉(1748通信使)頃日本で鉄砲1挺の価格は銀貨5百両ほどであった。

時の活動に関しては不明であるが、武器製造等に関係したと考えられる。

洪大容と朴趾源の地球自転説は低い段階の教養次元だといわれるが、彼らの思想体系の確立には影響を与えた。洪大容の思想は朱子学と反朱子学の中間に位置、価値相対主義的観点であるという。<sup>17</sup> 彼の思想の形成には、西洋の科学知識が作用していたといえる。彼の家系が観象監と関係が深く、早い時期から数理科学書、天文機器等に接する機会が多かった。燕行に出る前に製作した渾天儀、龍水閣の通天儀も、羅景績(1690-1762)と黄胤錫(1729-1791)等の協力で作ったものであるが、彼の家系と関係がないとはいえない。彼が「鑿山問答」で主張した実学、実証的学問も、朱子学の本場である清を直接体験することにより事象を直視することができた。殊に彼が学問的に主張した実学・実用、又は、燕行の旅で見て感じたことが、実際に生活を向上させるための機械や道具の使用等、それを製作して改善すべきであるという提言がどこまで実現され、どれほどの波及効果があったのかという点に於いては言い難い。しかしそのような提言が当時代に論議されたことはやはり生活上の必要より出たに違いない。

当時西洋の科学、科学知識が数多くの知識人らに受容し、またそれを日常生活に適用しようとしたのである。しかし、姜在彦によれば実際に朝鮮に受容されたのは、時憲暦と擧重機だけだという。<sup>18</sup> しかし、その他、前に言及した硫黄と焰硝の開発と固定的供給のための鑛山開発、鉄砲・大砲の開発と改良、又、1785年に観象監が製作した日時計等も挙げられる。

先ず、時憲暦であるが、清に於いては1644年から湯若望の時憲暦を受け入れて施行したが、1684年と1726年改定施行した。1742年には再び獨逸人神父、戴進賢の暦法を使用した。朝鮮では金堉の時憲暦の建議を受け入れて1653年に採択し、太陽暦を取り入れた1895年まで使用するようになる。施行する前の1651年、金尙範を清の欽天監におくり、時憲暦を習うようにしてから施行に踏み切っている。1708年には時憲暦に五星法を導入し、1726年には新修時憲七政法になおした。

朝鮮は清の冊封体制の下に置かれたから清の冊暦を受けていた。清の冊暦を改定するたびごとに朝鮮も改めた。しかし一方で清の冊暦と合わないところがあるために朝鮮の冊暦を別に作った。従って、時憲暦に関する研究そのものも続くことになったのである。

また、擧重機の製作である。1796年に朝鮮の新都市である水原華城市を、2年余の期間の内に完成するようになった、当時、工事の総責任者である丁茶山(1762-1836)が擧重機を使用し、工事期間を短くしたのである。彼は『古今圖書集成』の中の「奇器図説」(明代 西洋人 鄧玉函)を参考にして擧重機を製作した。「奇器図説」は四庫全書の中にも入っている。『古今圖書集成』が朝鮮に輸入されたの

<sup>17</sup> 川原秀城、「洪大容の科学知識と社会思想」、2006年10月国際日本文化研究センター第29回国際研究集会発表論文

<sup>18</sup> 姜在彦、『西洋と朝鮮—その異文化格闘の歴史』、文芸春秋、1994

は1776年であり、1778年にはその中の一部 漏落されたものを、李德懋が北京で買って来た。『四庫全書』も刊行直後、すぐ輸入する。徳川幕府に1764年に『古今図書集成』が舶来されたが徳川幕府の購入の時期に対する記録は明らかではない、『四庫全書』とともにこの二つの本を18世紀後半には輸入されたという<sup>19</sup>。

日時計の「簡平渾蓋日晷」(韓国宝物 第841号)は、1785年に朝鮮の観象監が製作した。一枚の白い岩の上に、違う二つの種類の日時計を刻して、これを簡平日晷(上)、渾蓋日晷打と呼ぶ<sup>20</sup>。

水車については朝鮮の朝廷が様々な検討を行い論議をかえた。15世紀中盤から論議があり、孝宗王は1650年頃盛京と燕京で見たことを土台にして製作、その後も数多く論議と製作を繰り返し、朝廷でも設計図及び制作したものを保管していた。しかし、このようなことが農村の実情に合わず製作費も多く必要であった。1740年にも徐光啓の設計が妥当だと論議があった。一方、日本の淀城に設置されている水車に関しても検討されてきた。1711年の使行時から1764年まで持続的に検討はしたが、実際の製作したのか、どうかに関しては不明である。

又、車輪と煉瓦の製作に関する論議も朝廷から多くあった。利用と厚生という面から論議があったが、実際の使用に関しては不明である。

事実、朝鮮が清と徳川幕府を観察したこととは別に、朝鮮の実相はどうであったかを示す資料として、清の勅使が見た光景を画にした『奉使圖』がある。『奉使圖』は総20幅になっている、一種の案内図である。

清の阿克敦は、1725年に勅使として朝鮮を訪問する。これを前後にして彼は、総四回も朝鮮を訪問したほどの朝鮮通である。1725年の朝鮮訪問の時、彼は国境付辺の鳳凰城から始まり、漢陽で所任をすまして、再び義州から本国に帰国するまでの光景を20幅の画帖に描いている。又、各幅ごとに題画詩を付けてあり、門人・弟子・知人の讃詩も付けられている。画の一番はじめは鳳凰山の野宿から、彼が通った沿辺の山川と都会の様子、人物、儀式等等、彼の目にうつった、朝鮮の山河からもっとも印象が深った光景を描いている。

その中から2幅をとり挙げ、彼が観察した朝鮮の様子を調べることにする。

先ず、第6幅の農村風景である。どの地方かははっきりわからないが、画の順序

<sup>19</sup> 大庭脩、『江戸時代における中国文化受容の研究』

『古今図書集成』は1764年に長崎に舶来されたが幕府が購入したのは後の18世紀後半頃だという。

<sup>20</sup> 安大玉、「アストロラープの東伝と朝鮮の簡平渾蓋日晷」、2006年10月国際日本文化研究センター第29回国際研究集会発表論文。彼によると「簡平渾蓋日晷」を製作する時17世紀中国で漢訳した西学書『簡平儀説』(1611年 熊三拔、徐光啓)と「渾蓋通憲圖説」(1607年 利瑪竇・李之藻)2冊に根拠したという。2冊共に1629年李之藻が刊刊した『天学初函』器篇に収録されている。理篇所収『天主実義』と同器篇所収の『幾何原本』、『同文算指』と共に比較的早い時期に朝鮮に伝えられた西学書だという。



【図 25】 奉使圖 第 6 幅

から見ると多分北の地方だと推定される。この図は 桃源境的農村風景を描いたものである。背山臨水の典型的な農村様子である。山に位置した人家、村の前方を流れる江、その辺りに田がある。柳が垂さがって行って、濃い緑陰から見て晩春とみえる。農夫は田を耕すのに奔走する様子である。田を耕しているところから見て直播ではない移秧農法である。多分この時期にすでに農業技術が向上されたように見える。

先ず、画を見ると田を耕すことに、いそがしいそうな夫に間食を持っていく妻の心がよく現れている。大変いそがしいそうな表情が歴々する。しかし、母の忽忽とする歩みについていけない子供の動作は一方に傾いている。母と子供の対照的な動作と表情、夫に向った奥様の視線が目立っている。これとは別にたのしく走っている子犬は二人の母子と遊ぶような動作をしている。田を耕すのに忙しそうな夫の囲の状況と関係なく黙々として仕事に熱中している様子が面白い。題画詩にも画と同じように歌っている。水利利用、背山臨水の居住地、松籬苑、素朴な草廬等が自然と調和をしていて、より情致があると詠じている。

田畝亦知營水利、人家大半近山居。  
松枝折得添籬落、蒼翠蕭疎映草廬。  
(地宜稻梁、人居山谷、松籬苑屋、亦有清致)

やはり、この画は桃源境的農村風景と移秧式播種が目立つところにその特色がある。

次は都市風景を描いた画である。朝鮮の国境地域である義州から安州、黃州、平壤、開城に至るまでの4個の都市が繁盛していると、彼は題画詩の末尾に附けている。都市の建物、官衙、巷を疾走する役人、立ち並んでいる茶屋、奔走に見張人々、殊に官衙には客を迎える支度が整っており、庭には網渡りの広大が網につけさげられている。即ち都市的雰囲気、勅使を迎えようとする雰囲気が目立つ画である。題画詩にもこのように都市の生動感をよく歌っている。



都城繁盛異尋常、 此日爭看士女忙。  
行到街頭廬舍畔、 瓶供清水案焚香。  
(安州、黄州、平壤、開城数大城、較他邑为盛)



【図 26】 奉使圖 第 12 幅

上記で言及した二幅の画を見れば18世紀の初葉の朝鮮の桃源境的農村光景と、開城を始めに他の都市の様子が阿克敦には非常に印象的であったようである。彼は殊にその中に平和で豊かに生きている人々の様子を描きたかったようである。

## 6. 結

近世における東北アジアの三国は、朝鮮と清、徳川幕府に再編される。再編の初期の過程に於ける混乱と経済的な窮乏も、1670年頃になるとようやく安定し、経済、文化多方面にわたって活力をおびるようになる。これに弾力を受けて18世紀初めから19世紀初めに至ると、史上由来のないほどの文明の花を咲かせるようになる。

朝鮮は地政学的特性上、「事大交隣」政策を近世にも維持し、清には燕行使を、徳川幕府には通信使を各各派遣した。この使節団が、地域内の唯一の疏通のための通路口として、又は地域内の文明圏形成のための立役者である。

東北アジア三国における文明の花を咲かせるようになった動因としてはいろいろのことが想定されるが、地域内における長く持続された平和と仲介貿易を通じた経済力の向上と学問の発達からその要因が挙げられる。しかし、そのなかでも学問の発達が優先されうるだろう。この時期、朝鮮では実学、清は考証学、徳川幕府は蘭学が各各学問を導いていた。しかし、蘭学が花を咲かせるのは18世紀末から19世紀初めにかけてであり、蘭学の発達には朱子学がその基調になっていた。

朝鮮の実学は、18世紀前半から19世紀前半に至る迄の学風として、実事求是に、その思想性を置いていた。それは李瀾を中心とする経世致用学派と洪大容、朴趾源

を中心にする実用性に土台を置いた利用厚生学として分けられる。李瀛の経世致用学の中には伝統重視の面とともに、変革的な傾向性が現れているという点が特異である。利用厚生学は、価値相対主義的認識と合理的思考が根底にある。従って外部文物の受容に於いて開放性が強い。彼らは清朝考証学者らとの交流と文化受容に積極的であり、メンバーの中には使節団の一員として、清と徳川幕府の両方を訪問する場合もあった。殊に西学と西洋科学・技術受容に積極的であった。

一方、清朝の考証学は18世紀前半から19世紀前半の清の乾・嘉時代の学風を称えることで、<sup>21</sup> 根本精神は、实事求是に置き、考証学的方法によって、事物のまじめの様子を構想し出す方法論をいう。経学の開祖としては、顧炎武(1613-1682)を、史学は黄宗羲を称え、文字学、歴史学、地理学、金石学等、広範な分野に至る。彼らが主にした作業は、①古典テキストに関する綿密な考証 ②經典に関する注疏の誤謬を正しくなおし古典研究の基礎の下拵。③すでにちりひろがなくなった遺書の復元と文献整理等である。この作業過程に『古今圖書集成』、『四庫全書』編纂も入る。この本を朝鮮と徳川幕府が輸入して、西学乃至西洋科学を受容するようになる。

蘭学は、和蘭を通して西洋医学と科学の受容からはじまる。しかし、その主流を成すのは医学部分である。蘭学が盛んになるのは、1774年の『解体新書』の刊行からはじまる。前野良沢、杉田玄白(1773-1817)、中川淳庵3人が死刑囚の腑分を解剖を試み4年掛かりで『解体新書』の翻訳作業に着手してこれを完成する。この完成を契機に漢方医らは西洋医学に関心を傾けるようになる。玄白は和蘭の外科医を家業として、小浜藩の藩医としての職を担当し、1815年には彼が漢方医から蘭学に転換した過程を書いた『蘭學事始』を著述する。

徳川幕府に於ける初期蘭学の研究者らは、大部分が漢方医である。彼らは普通、漢方医書から記述していた観念的、或いは、不正確性に疑問を持つうちに、西洋の身体解剖図の正確さに驚き、西洋医学に転換した。しかし、初期の蘭学者らの大部分は漢方医学、又は漢文学の実証主義的知識体系の中で訓練されていて、近代科学的な方向に転換したのである。

東北アジアの三国、朝鮮、徳川幕府、清に於ける文明圏を形成するに於いて、その動因が地域内に於いての交流によることだけではない。清と徳川幕府は、西洋に向かった別途の窓口が存在していた。これを通してそれぞれ受容された文明が地域内で相互交流という窓口を通して、より活性化ができるようになったことが、文明圏形成に一翼を担ったといえる。殊にここで蓄積された知が、転換の際に近代的知として多方面にわたって大きく役割をはたしたことは再三考えざるをえないのであろう。<sup>22</sup>

<sup>21</sup> 近藤光男、『清朝考証学の研究』、研文出版、1987

<sup>22</sup> 佐野真由子、「幕末の対欧米外交を準備した朝鮮通信使—各国外交官による江戸行の問題を中心に」、2006年10月国際日本文化研究センター第29回国際研究集会発表論文

## 参考文献

- 『海行摠載』  
申維翰 『青泉先生 續集』  
申維翰(姜在彦訳注)『海游録—朝鮮通信使の日本紀行』平凡社、東洋文庫、1974年  
林基中編 『燕行録全集』東國大學校出版部、韓國、2008年  
『燕行録選集』大東文化研究院、成均館大学、1962年  
朴趾源 『燕巖集(全)』慶熙出版社、1966年  
安鼎福 『順庵全集』大東文化研究院、成均館大学、1970年  
中村栄孝 『日鮮関係史の研究』吉川弘文館、1965・69年  
三宅英利 『近世日朝関係史研究』文献出版、1986年  
田代和生 『江戸時代朝鮮薬材調査の研究』慶應義塾大学出版会、1999年  
李進熙 『江戸時代の朝鮮通信使』講談社学術文庫、1992年  
仲尾宏 『朝鮮通信使』岩波新書、2007年  
『亟海叢書の版本及基編者李調元』台湾国立図書館、民國 83  
李調元撰挿入 『鶴山手抄』 「雨村詩話」  
崔博光 「李德懋の中國體驗と學問觀」大東文化研究 第 27 輯、1992 年  
崔博光 「韓日間の文化交流」『人文科學』成均館大 人文科學研究所、1999 年  
崔博光 「落花生の傳來と韓日文化交流」『比較文學』第 24 集、1999 年  
奉使圖 暎園大學校 アジア問題研究所  
槎路勝區圖 韓國国立博物館  
伊藤東涯 「紹述先生文集」天理図書館 古義堂文庫  
大庭脩 『江戸時代における中国文化受容の研究』同朋舎出版、1984年  
近藤光男 『清朝考証学の研究』、研文出版、1987年  
三木栄 『朝鮮医学史及疾病史』富士精版印刷株式会社、1963年